



谷崎潤一郎文庫

羹 神童
異端者の悲しみ
鬼の面

六興出版



谷崎潤一郎文庫

八八〇円

第四卷 羹・神童・鬼の面 他

昭和四十八年十一月二十日 発行

著 者 谷崎潤一郎

発行者 吉川 文子

印刷 大日本法令印刷

製 本 手塚製本

発行所 六興出版

東京都文京区水道二―九―二

郵便番号 一一二

電話〇三(九四三)三四三一

振替 東京 九二四四八

© 1973 MATSUKO TANIZAKI, Printed in Japan.

落丁・乱丁の本はお取り替え致します

0393-02404-9216

目次

羹

三

神童

一三二

鬼の面

一〇一

異端者の悲しみ

三三

注解

四九

解説

四二

監
修

野 谷
村 崎
尚 松
吾 子

あつもの
羹

一

汽車は沼津を出てから、だんだんと海に遠ざかつて、爪先上がりの裾野の高原を進んで行くらしかった。八月の真昼の日光が、濃い藍色に晴れた空から真直に射下ろして、折々一寸二寸ぐらいずつ、窓枠の縁を焼き附けていた。

橋はこの暑いのに一高の小倉の制服をきちんと着込んで、乗客の疎らな二等室の片隅に腰を掛けていた。彼の向い側には十七八の芸者らしい女と、その姐さん株が、乃至は待合の女将かと推測される四十近い婦人が、俥の膝懸けを臂に敷いて、双方から凭れかかるようにしどけなく坐りながら、富士山の頂上を眺めつつ、何かひそひそと語り合っていた。車の動揺するままに、柔らかいびろうどの蒲団が馬の背の如く躍り上がると、肉附きのいい芸者の体はしなやかに揉まれて、房々とした髪の毛まで、鳥が呼吸をするように、ふわり、ふわりと顫えて見える。

豊川稲荷へでもお参りに行った帰りであらう。豊橋、浜松、弁天島あたりの旅館のレッテルを貼った荷物やら土産やらが、椅子の下にも棚の上にも沢山載せてあった。若い方が、足許のお茶の土瓶を取り上げて、

「姐さん、帰るまで保つてしょうか。」
と云いながら、蓋を開いて覗き込むと、

「大丈夫だとも、家へ持って行けばきつと鳴き出すよ。」

こういつて年寄りも一緒に覗いている。土瓶の中には、大方河鹿でも入っているらしい。

「もしか途中で死んじゃったら、口惜しいわね。」

と、若い女はあどけない口元で笑っている。

一二時間の後、国府津の停車場へ着いてから、東京まで密かに自分と同乗するはずの美代子が入って来たら、この女達はどんな眼つきをするだろう。そう考えると、橋は面白いような、恐ろしいような気持ちになった。学生としては贅沢な二等室を選んだのも、美代子の便利を慮ったためであるのに、こういう女と乗り合わせては、却って肩身の狭い思いをしなければならない。あの慎ましやかな、お嬢さん育ちの美代子のことだから、気の毒なほど小さくなって、自分の側へひっそりと身を寄せかけはしないだろう。

その時のいじらしい姿を想うと、彼はまた抑え切れぬ楽しさと欲ばしさに襲われた。六月の末、沼津へ行き掛けに箱根を訪れて、病み上げの杖に縋りながら、美代子と一緒に

大涌谷を見物したのは、もう二た月ばかり前になる。一旦生命までも奪られようとした病いの痕を癒やすべく、それから毎日毎日千本松原の汐風に体を鍛えて、面变りのするほど真黒に肥え太った現在の様子を見せたらば、どんなに美代子は嬉しがらう。初恋の人とただ二人、生れて始めて汽車旅行を試みる今日の機会に、何もそれほど世間を憚る必要はあるまい。美代子に対する自分の感情が純潔である以上、少しも疚しくない証拠に、自分は殊更学校の制服を纏ったのではないか。……彼はこう度胸を据えて、勇躍するように窓際へ立ち上がった。

戸外には涼しい風がぱたと鳴って鏝の広い麦藁帽子を飛ばさんばかりに、吹き通していた。彼は襟頭に滲み出た汗の一時乾き切るような心地よさを味わいながら、窓枠に両肘を衝いて、沿道の景色を眺め入った。

いつの間にか汽車は御殿場近くの山麓をどんどん走っている。沖天に輝く太陽の威力を真向に浴びて、橘色の山肌を露わにしている裸体の富士の、ひろびろと拡げた裳裾の上には、箱庭のような森や人家が点々と連なって、見ている中に後ろの方へ迂って行く。足柄箱根の山の肩が、次第次第に近く高く右の方から突き出て来る。時々四角な田や

畑が、前の方から線路の傍へ跳び込んで来て、たちまちいびつな菱形に歪みながら、遙かに遠く押し流される。左に見えた愛鷹山の青い背中が、だんだんと富士の裏側へ駆け込むように隠れてしまう。

何という愉快な景色であろう。……何という愉快な日であらう。……彼は今日ほどこの辺りの風光を美しく、面白く眺めたことはなかった。瞳に映る山川草木が、ことごとく自分の仕合わせな身の上を祝福して、媚び諂っているかのように感ぜられた。恋と健康との喜びが、心の髄まで浸み徹して、すべての物を彼の眼前に輝かせてくれるのであった。彼は恋人の容貌を見、恋人の声を聞くのと同じような楽しい心地で山々の姿に見惚れ、裾野の風に耳を傾けた。

早く、一刻も早く国府津まで飛んで行きたかった。もう何時間……もう何分……こう思っただけは待遠しそうにポケットから時計を抜き出したり、焦れたように足踏みをしつつ口笛を鳴らしたりした。その間も、急速力の汽車は絶ゆる隙なく距離を縮めて、国境の山の峽を伝わっていた。両側から地勢の迫るに随い、曠漠たる裾野の末は小さく狭まれて、丘や林が眼近く立ち並ぶようになった。遠く

に聳えていた一つの峰が二つに割れて、幽邃な谷を開いて迎えたり、雑草の底に囁いていた溪流が、やがて白い泡の巖を噛む河床を現したり、断崖の角を曲る度ごとに、一つ新しい山懷が右に左に展けて行った。どうかすると青空が高く隠れて、牢獄のような絶壁の石垣ばかりが、つい窓際に長く長く続いた。それが尽きると、ぱっと眼界が明るくなって、山勢が遠く退き、尾上の木々の繁みの中から、細い滝がちらちらと落ちたりした。

隣りの一等室のドアを開けて、十三四のボーイが急ぎ足で入って来た。そうして、スイッチを捻って室内の電燈をつけると、今度はばたりばたりと片っ端から窓硝子を締め始めた。

「ボーイさん、トンネルなの？」

後ろ向きに俯むいていた若い芸者が、重そうな額を擡げて訊いた。

「ええ、もうじきでございます。」

「そう、トンネルは幾つあって？」

「八つございます。」

行儀よく直立して、こう答えた後、ボーイはつかつかと次の車室へ歩み去った。

「ああ。」

と、軽い溜息をして、芸者はハンケチを蟬谷へあてながら、倒れるように臥転ぶと等しく真白な空氣枕へ銀杏返しの頭を載せた。

間もなく、ガラガラガラと凄じい音響の底へ引き入れられると、欄間から白い煙が濛々と舞い込んで、黄色い鈍い燈の光が、蒸し暑い部屋の中に濁り漂った。汽車は暫らく八つのトンネルを出つ入りつした。

「このトンネルさえ越してしまえば、国府津はすぐだ。」と彼は思った。覚えのある派手な琥珀の日傘をさしてプラットホームに亘んでいる美代子の倅が、彼にはもう見えるような気持ちになった。

小山を過ぎてから、野と海とが再び近づき始めた。恋人の生れ故郷の相模の国、なつかしい相模の国の、はるばると続いた平原の果てには、水蒸気の濃い靄が、金色の光に燃えて打ち煙っていた。ところどころに波うつ丘陵の青葉の匂いや、大空の雲の勢いや、紫がかった遠山の風情まで、ことごとく親しみ深い相模野の景色であった。酒匂川の鉄橋を渡る時、足の下にはさも涼しそうな水が笑って、橋杭のぐるりに渦を巻きながら流れて行った。その水の注ぎ落

ちる川下の浜の方には、ざぶん、ざぶんと相模灘の怒濤の崩れる音が聞えて、飛沫の末が灰のように舞い上がった。汽車は次第に速力を弛めて、徐かに停車場の構内へ馳せ入った。

「国府津。……国府津。」

二三人の駅夫がこつこつと靴を鳴らして通った後から、乗り降りの客が忙しげにプラットフォームへ下駄を引き擦って歩いていった。箱根帰りの一隊らしい五六人の男女の群が、どやどやと景気よく二等室へ跳び込むや否や、大声で暑い暑いとこぼしながら、傍若無人に扇を使ったり、ハンケチを振ったり、冗談を云い合ったり、たちまち車内は賑やかになった。例の芸者もこの騒ぎにうたた寝の眼を覚まされて、後れ毛を掻きつつ起き上がった。

待てども、待てども、美代子の姿は容易にブリッジを下りて来なかった。家の首尾が悪くて抜け出す折がなかったのか、それとも約束した時間を思い違えたのであろうか。今日はこのまま会えないで、東京へ帰らなければならぬのか。そんな悲しい、口惜しい成行きになったらどうである。この上彼は半時たりとも、恋人の顔を見ずには暮らせそうもなかった。汽車はもうじき動き出すのに、子供の

ように泣き喚いても美代子は遂に來てくれないのか、そう考えると、彼は胸が塞がって、不愉快な憂いの雲に抑えられるような心地がした。

構内には最早や一人の客もなかった。漸く西に傾いた日が、たたきの上をじりじりと気長に焼きつけているばかり、折々停車場の事務室の受信器がキチキチ鳴って、海の方から潮の香の高いそよ風が、人の心も知らず顔に、差し伸べた彼の頬を颯々通った。

がらん、がらん、と五分鈴が響き渡った時、構内は戸外のきらきらした往来に、クリーム色のバラソルが胡蝶のようにひらめいて、惶しく構内へ躍り込むのをちらりと見た。突然彼は動悸が激しく血管を衝いて、肋骨のあたりがひやりとするような Shock を覚えた。手も足も唇も、不思議にわなわな戦いて、五体が瘡を病つたようにふるえた。

「お早く願います、お早く！」

けたたましい催促の声を浴びせかけられながら、美代子は千代田草履をばくばく云わせて、橋の車室の前まで駆けて來たが、ふと気が付いたように、

「あッ此処は二等なの？ 買い直して来ようかしら。」

こう云つて、赤い切符を帯の間から出した。

「もう時間がございませんから、そのままお乗りになつて宜しゅうございます。」

と、駅夫は後ろから彼の女を押し上げるようにして扉を締めると、呼子を口に咬えてピーと吹いた。

「ああ忙しなかった。あたし、わざわざ三等の切符を買つて来たのよ。」

こう囁いた時、美代子は乗客の視線が自分に集まっているのを悟つて、上気した襟のあたりを恥かしそうにポウッとさせた。うすいお納戸の細織の単衣に、白っぽい紋紗の丸帯を締め、細い金の提灯鎖を頸にかけた十七八の令嬢姿に、男も女もじろじろと眊を与えて、一挙一動にも眼を放さないようであつた。

「もう少ウして乗り遅れるところだったね。」

こう云つた橘の声は非常にふるえて唇のわななきがまだ止まらないらしかった。待たされて、待たされて、待たされて、さんざん思い焦れていた気苦勞の半分だけでも、具に憩えて見たかつたのに、咽喉がつかえて自由に舌が廻らなかつた。今日が日までに慍い慕つていた女の容貌も、面と對つては白粉の香や髪の匂いに妨げられて、却つて想像

の方がハッキリするように感ぜられた。楽しいのか、恐ろしいのか判らないくらい、彼の神経は興奮していた。美代子に対する自分の恋が、これほど命の底深く根ざしていることを、彼は始めて知つたのであつた。我ながら訝しいような狼狽えた態度を、女に窺われるのが嬉しくも恥かしくもあつた。こういう場合、女は案外男よりも落ち着いて口を利くことができた。

「宗ちゃん、もう体はすっかりよくなつたの？　また勉強を始めたら、悪くなりはいしくつて？」

二人は、乗客の視線を免れるように、二つの窓から頸を出して、顔を列べていた。美代子の言葉は耳元を掠めて走る風の速さに浚われて、かすかに後方へ消えて行つた。

「もう大丈夫だろう。」

快活に淡泊に、橘のこう答えた時、眼の前に塞がっていた緑樹が尽きて、陸地がだらだらと砂浜へ下がり、太い高い磯馴松の疎らな隙から海が光つた。そんな物にも、橘の心は刺戟された。

「家の工合はどうだったい。」

と云いながら、彼は思い切つて、風上の女の方へ頭を向けた。そして、煤煙に吹き附けられるのを躊躇うかのよう

に、わざと眼瞼を伏せて、睫毛を長くした。

「別にどうもしなくってよ。ち、い、と大磯のお友達の家まで行くつもりで出て来たの。……お母さんが汽車はいつでもあるから髪を直しておいでなさいって云うもんだから、断る訳にも行かなくって、あたし気が気じゃなかったわ。でも間に合ってたわね。」

汽車の震動に妨げられまいと、美代子は心持ち調子を張って、りんとした声で云った。結び立ての髪が風に煽られて、橋の顔の方へ柔らかそうにふわふわと揺れて膨らんだ。いつしか血色が真白に覺めて、唇の紅いのが殊に目立って見える。

「それじゃ東京へ行っても、今日ゆっくりできないんだね。」

「ええ、新橋へ着いたらすぐ帰るわ。こうやって話をするのは、汽車の中だけよ。」

こうは云ったものの、男も女も、どんな話をしていいか解らなかった。二人とも一緒に坐っているだけで十分であった。話をする隙に、自分達の現在の幸福をつくづく考えて、喜んでおきたかった。

橋にせよ美代子にせよ、これまでまだお互いに「愛」とか

「恋」とかいう大胆な詞を口にも文にも出したことはなかった。「ぜひ一度会いたい。」とか、「くれぐれも体を丈夫にしてくれろ。」とか、そんな言葉に恋慕の情の万分之一を籠めて、相思の意味が通じ合うもののように満足していた。さすが女は角張らぬ言い廻しのうちに、心の底には、きりと行き届かせる優しみを持っていたが、男には到底そんな婉曲な直似はできなかった。とにかく二人とも、明らかな事実を立派に意識していて、尋常でない素振りや行動を取りながら、今更それを語り合うほどの勇氣がなかった。

「ほんとに宗ちゃんは大丈夫。もう量だって十二貫じゃないでしょう。」

美代子は汐風に染まった男の手頭を眺めて、低く囁いた。

「十四貫八百目ある。」

「そう、そんなに殖えて？」

こう云った女の眼つきには、喜びの色が溢れて見えた。

橋は、美代子の平生と打って変った活気のある態度の原因を、満更窮屈な家庭を逃げて来て、自由な戸外へ放り出された理由にばかり帰する訳には行かなかった。女の身として、両親を偽ってまでも一二時間の対面を楽しみに、一緒

に道中をするということが、自分に心を許している証拠でもあり、機嫌のよい所以でもあらうと推した。

彼は小田原の美代子の家の事情を詳しく知っていた。……

美代子の父、清助というのは、商売にかけてはなかなか抜け目のない代り、若い時分から放蕩の限りを尽くして、二三人の妾もある上に多勢の子を孕ませ、それがみんな一軒の家に同居していた。そうして、正妻のお綱が、老い先の楽しみとするのは、正腹の娘の美代子一人であった。

美代子が町の小学校を卒業した時、手許から娘を放すのを拒んだが、清助は東京の女学校へ入れると云って聴かなかつた。

「だから女親ッてものはしょうがない。お前のように下手ッ可愛がりはいないけれど、己れだって娘は可愛いんだぜ。小田原と東京なら目と鼻の間だ、いつだって帰って来られるじゃないか。」

こんな理窟を云って、遠縁の親類にあたる浜町の橘の家へ、とうとう美代子を預けてしまった。其処から彼の女は虎の門へ毎日通った。其処から彼等の恋は始まった。

相応に財産もある清助の家督を、誰に譲らせるつもりであ

ろうかと、お綱は始終夫の意中に惑い煩った。たとえ男子にせよ、妾腹の者には決して家督を取らせたくはなかった。そんなことがあったら、自分は娘を連れて分家でもするより外はない。こういう意地張りから、母は一層厳しく美代子の監督に気を配って、東京へ出しても都会の悪風に泥まぬよう、土曜日ごとに帰省を命じた。それから今年の卒業と同時に、早速国許へ引き取ってしまった。

温厚な美代子は、東京にいても国へ帰っても、母の身の上と自分の将来とが案じられて年中心が鬱いでいた。お転婆ぞろい、腕白ぞろいの妾腹の兄弟達の中に交って、世間の人に後ろ指をさされまい、便りに思う母の期待に背くまい。そういう苦勞が積り積って、いつとなく橘などに尋ねられると、愚痴をこぼすようになった。

「あたしおッ母さんを此処の家へ伴れて来てしまいたいわ。」

などと、浜町の家の二階で、橘に訴えることがあった。彼の女は橘に対して、恋慕していると云うよりも、もう少し真面目な、實際的な考えを抱いていた。

橘の顔を眺めている時だけ、美代子は自分を仕合わせだと思ひ、自分の運命を必ずしも悲観しなかった。せめてこの

人との会談だけは、氣を惹き立てて、世間の若い女に負けず、晴れやかな眉をも開き、朗らかな調子で応答をもしようとする。けれども今日のような人ごみの中に長い間膝を擦り寄せ、ろくろく言葉も交さずに項垂れておれば、果てはやはりいろいろの心配事が胸にもつれて、自然と頭が晦くなった。国府津で乗り合わせた瞬間の感情の高潮が、

彼等を沈黙の幸福の裡に包んだのも束の間であつた。程なく単調に飽きた二人は、重々しい氣分を一掃するために、何か話題を捉えて見たかつたが、どんな小声で喋舌つても隣りの客に聞き取られるので、お互いに向はすまなかつた。殊に女は停る度ごとに、乗り降りの人の様子をそつと竊み視て、知人に遇うのを恐れていた。

新橋へ着くと、美代子はホッとして、病人のような溜息をついた。橋は赤帽に行李を託して、女と並んで改札口を出ながら、

「美代ちゃん、どうしよう。……ちよいと何処か、静かな処へでも行こうか。」と云つた。

「そうね。」——と、美代子は小型の金時計の蓋をパチンと撥ねて、——「もう五時半ね。」

「それとも内証で、浜町まで来たらどうだい。」

橋はわざと女の躊躇う氣色を認めないように、重ねて訊いた。

「いけない、いけない。」

女は下を向いて、首を振って、

「……浜町へ知れても、家へ知れても悪いから、あたしこれからすぐに帰るわ。ほんとに初めッからそのつもりなのよ。七時か八時までに必ず帰れッて云われたのに、今すぐ帰つたッて九時になるわ。」

男には女の決断力のよいのが恨めしかつた。自分と美代子と地を換えたら、彼にはとてもそんな思い切りのいい仕打ちにはできそうもなかつた。自分の思っている半分も女は自分を思っていないはくれないのか、そういう不平も袂まれた。けれどもこの場合別れるなら別れるで、男はなるべく二人の幸福を傷つけるような言動を慎み、能う限り楽しい、快い感情を胸に盛り上げて別れたかつた。どうしても自分は、天に感謝し、人に羨まれなければならぬような境遇に置かれたものと信じたかつた。

「汽車の中じゃ、なんにも話ができなかつたわね。こんなことになるくらいなら、一層来ない方が宜かつたわ。」

と、美代子は瞳を潤ませて、苦しそうに口元でにっこり笑

った。男はそれでも満足した。

「東海道神戸行、……東海道神戸行」

駅夫が鈴を鳴らしながら、叫んで通るのを聞くと、女はすぐと氣を取り直して、

「それじゃこれへ乗って行くわ。」

と、軽く頭を下げた。そうして、入場券を買いに行こうとする橋を無理に制した。

「もうほんとに見送って頂かなくッても沢山よ。誰かに見付かると大変だから、此処で失礼するわ。」

こう云って、惶しく立ち去ろうとしたが、再び橋の前へ足を止めて、

「宗ちゃん、ほんとに妾を忘れないでね。」

と、改札口の雑沓に揉まれながら耳打ちをした。

やがて女の姿が、長い長いプラットホームを駆けて行つて、列車の踏み台をひらりと跨いで室内へ消えてしまうまで、男は其処にぼんやりと佇んでいた。折角の手の裡の玉を奪られたような残り惜しさがひしひしと胸に應えて、どうしたらこの恋いしさを抑えることができようかと、彼は暫らく途方に暮れた。ああまた会えるのは何時であらう、一週間立ったら会えるか、一と月立ったら会えるか、それ

とも半年か一年か、再びその日の廻つて来るのは、遠い、覚えのないことのように感ぜられる。賑やかな東京の街の中央に住みながら、朝夕一念を小田原に馳せて、取り着く島もない淋しさ辛さを、幾日繰り返さなければならぬのであらう。……

彼は不承不承に赤帽から行李を受け取って、浜町へ俵を走らせた。

「ほんとに妾を忘れないでね。」

こう云った別れ際の言葉は、まだ彼の耳に響いていた。その時の美代子の輝いた眼つき、かすかな唇の戦き、それを想い泛べると、悲しいながらも甘い慰藉を味わわれた。

「ほんとに妾を忘れないでね。」——彼はこの文句を幾度も心に繰り返して、鬼の首でも取ったように喜んだ。

「女が本当に自分を慕ってさえおれば、近いうちにまた会う機会も作れるであらう。日曜あたりに、此方から小田原へ出掛けて行つても、そんなに世間で怪しみはすまい。別段が、かりするに及ばぬことだ。」

と彼は俵の上で考え直した。そうして、息を深く吸って、さも得意そうに木挽町の往来を彼方此方眺め廻した。可笑しなことには、俵がだんだん浜町へ近づくと、随い、憂鬱な

先の気分とは全く異った得意の情がいよいよ増して、何も知らずに自分の帰りを待っている両親に対してさえ、一種の誇を抱くようになった。

二

橋の家は浜町三丁目の至極閑静な新道にあって、小さく、はりした格子造りの二階建ての後ろに黒い艶のいい土蔵の壁が、漆塗のように光って見えた。元はある旧俳派優の住居であったのを五六年前父の宗兵衛が相場で中てた頃、兜町の方をうるさがって、また一つには悴の勉強のためを思つて此処を譲り受け、毎朝運動に店まで徒歩で通つてゐた。父と母と一人息子の子宗一と、三人の家族は小間使いに飯炊きの女を置いて、不自由もない代り、格別花やかな目にも遇わずに、地味な暮しを立ててゐた。

「ほんとに家あたりじゃ、小間使一人あれば御飯炊きなんぞ要らないんだけど、勿体ないことだ。」

母のお品は、いさゝかに困つて、折々こう云つたが、相當な仲買店の主の本宅であつて見れば、まさかそうする訳にも行かなかつた。美代子が厄介になつてゐる時分でも、お品は用事が一つ殖えて有り難いという風に、先へ立つて

何くれと面倒を見た。

「美代ちゃん、こんなことも覚えておくもんだよ。」

こう云つて、たまには台所の用を云い附けたり、来客の接待をさせたり、針仕事などを頼んだりした。美代子もお品にはよく懐いて、「叔母さん、叔母さん」と大事にして、云うことを聞いた。

「あの娘はなかなか感心なところがある。」

と、お品は始終褒めてゐた。

美代子が国へ引き取られてからのお品は、全く手持ち無沙汰であつた。夫と悴の着物の世話は人手を借りない上、日に三度も拭き掃除に念を入れて、それでまだ暇があると、女中の髪を結つてやつたりする。昔は芝居道楽であつたが、この頃はどうも頭が痛むと云つて、兜町連の切符を買つても、大概店の者か女中を遣つてしまふ。

「半四郎や高助がいた時分から見ると、この節の芝居はほんとにつまらない。」

と、口癖のように云つた。いつであつたか、久し振りに成田屋の追善劇へ誘われて、帰つて来ると高麗蔵の勧進帳をさんざん罵倒し、いろいろと古い役者の評判をした揚句、「そういえば、先に染五郎という役者があつたが、彼なん